

# 心と言葉のグローバル日本語文法 入門

## 要約

### 〈はじめに〉

#### 【要約】

- 日英・英日翻訳者にとっての最大の課題は翻訳理論・技法ではない。日本語文法力と英語文法力である。
- だがほとんどの人が日本語文法の十分な学習をしていない。母語の文法を十分に知らずして翻訳などできるはずもない。
- 「心と言葉のグローバル日本語文法」入門』は、心の働きを翻訳するために考案された唯一の日本語文法である。これを利用することによって、心と心をつなぐ訳文をつくりだすことが可能になる。

### 日本語とは

#### 【要約】

- 私たち日本人は日本語の文法や文章の書き方/作法について学ぶ機会がほとんどない。私たちは日本語に関する訓練を受けることなく、ただなんとなく日本語を話し、なんとなく日本語を書いている。
- 自分の言語もまともに知らないのに他人の言語のことなどわかるはずもない。私たちはなによりもまず日本語をよく知るべきである。
- 「和」の日本語は「人の視点」から世界を捉える傾向がきわめて強い。また、この世界を実体の集合体とはみなしていない。世界はひとつの「場」であり、実体はそのなかの要素にすぎない。

### 日本語の文

#### 【要約】

- 日本語の文には3種類の基本構造を考えることができる。「人・共同の視点」による文の基本構造、「天・共同の視点」による文の基本構造、「天・個の視点」による文の基本構造である。
- 日本語の文に3種類の異なる基本構造が考えられるのは、日本語が世界に稀な融合文明の産物だからである。
- こうした複眼的な視点からの考察は統一理論を目指す西欧的な分析のあり方とは異なるものであるが、日本語の本質の見抜くには複眼的な視点からの考察が必要不可欠である。
- 「人・共同の視点」は日本語の基盤をなすものである。「人・共同の視点」での世界認識では自他は一体化する。その結果、他者の世界観、思考、感情を自分のものとして理解し、感じるができる。このことが日本人に他者に対する深い理解と思いやりを生じさせている。だが自他を一体化することは自他を明確に区別できないことでもある。「人・共同の視点」での世界認識では「自己」の確立がきわめて難しい。日本人が個人としての意識が弱い原因のひとつは、ここにある。

- 「天・共同の視点」では、視点を自分から離して天に上らせることで大所高所からの広い視野を獲得できる。自分から離れるので情意的な理解は薄れ、理知的な理解の側面が強くなる。古代から日本の知識階層は、この視点を通じて日本語を使ってきた。
- 明治期になって欧米の文明を輸入する際、日本の学者たちは、日本語の認識を欧米語に合わせて変える道を選んだ。日本語の「てにをは」を欧米語の「主語」「目的語」「補語」「修飾語」などに対応させた。これが「天・個の視点」による文の基本構造である。西欧文明を吸収するための、ある意味で苦肉の策ともいうべきものである。

## 「は」「がをにの」認識

### 【要約】

- 「がをにの」は、日本語の要（かなめ）である。格助詞という便利な道具を使って、日本人は古くから外来語を日本語に取り入れてきた。江戸時代までは〇〇や××のところに漢語が埋め込まれていたが、明治期からは漢字やカタカナの姿を借りた西欧語が埋め込まれるようになった。そして明治期での西欧語の埋め込みの尖兵となったのが、翻訳文である。
- 私は、「が」には「が」の、「を」には「を」の、「に」には「に」の、「で」には「で」の、それぞれ独自の「意味」があるものとする。それは「機能的な意味」の根底に共通して存在する「こころの働き」である。そうした最も根底的な部分の「意味」を捉まえず、言語としての機能的な意味だけを分析することに、私は反対である。
- 「は」——「天・個の視点」での「～は」は、翻訳文体における「主語」を指示する。「漢」（天/共同の視点）による「～は」は、「トピック」を決める。「和」（人・共同の視点）による「～は」は、共同でみる「場」を決める。
- 「が」——「～は」と「～が」とは本質が異なる。「～は」と「～が」が「主語」に対応するから兄弟関係であるといった感覚は、英文法からの借り物である学校国文法によって明治以降に培われたものであり、現代日本語の3つの基本形のうちのひとつとして機能するものの、日本語の本質ではない。「洋」（天/個の視点）による「～が」は「主語」を示す。「漢」（天・共同の視点）からみた「～が」——「主格補語」を示す。「和」（人・共同の視点）からみた「～が」——「視線の行き所」を示す。
- 「を」——「洋」（天・個の視点）からみた「～を」は2つの実体間の影響-被影響の関係性を示す。「和」（人・共同の視点）からみた「～を」は場の出来事に直接関与するものごとを表す。
- 「に」「へ」——「～に」と「～へ」はともに到着点に向かう認識を示している。「～に」には到着点とつながるという認識イメージがある一方で、「～へ」の持つ認識は到着点とつながるかどうかは無関係である。
- 「と」——「和」（人・共同の視点）からみた「～と」は、つながりの認識である。モノとモノが「と」でつながることもあれば、モノとコトが「と」でつながることもある。
- 「で」——「和」（人・共同の視点）からみた「～で」は、コトに対する補足情報をそこに置くイメ

ージ。

- 「から」「より」——「和」（人・共同の視点）からみた「～から」「～より」——起点（はじまり）を示す・
- 「の」——ある成分が体言（名詞）へと展叙連体展叙）するための唯一のマーカである。成分を体言（名詞）へと展叙できるマーカはただひとつ「～の」だけである。ゆえに「～の」はすべての格関係に対応する。

### 「名詞」認識・表現

#### 【要約】

- 「和」の日本語での名詞認識・表現は「単層」構造である。英語の名詞認識のような複雑な認識が存在しない。
- 日本語の名詞には英語にはみられない特性がいくつかある第1が「有生性」、第2が「数助詞」である。
- 英語の the, a, 単数/複数などに日本語を一对一で対応させることは不可能である。

### 「述部」認識・表現

#### 【要約】

- 日本語の世界は、この「こと」（できごと）の捉え方として、「ある/いる」「する」「なる」という3つの系統を持っている。
- 「する」は、なにかの行為や状態が発生することを示す表現である。「漢語＋する」は、学問や実務の文章での定番表現である。「カタカナ語＋する」の動詞は、コンピュータ分野、ファッション分野、金融分野など、新しく日本社会に入ってきた分野で数多く用いられる。
- 「なる」は、なにかの行為や状態が「おのずとから」「自然に」発生することを示す表現である。「なる」は、きわめて日本語らしい動詞表現である。英日翻訳では「する→なる」変換の手法、日英翻訳では「なる→する」変換の手法がよく用いられる
- 「する」認識も「なる」認識も、どちらも人間の認識形態としては自然なものである。現在の日本語人は「なる」認識と「する」認識をうまく使い分けている状況である。認識のハイブリッド化が進んでいるといえる。このような柔軟かつ効率的な認識形態を持つ文化は、世界でも数少ない。私たちは「なる」と「する」のハイブリッド認識をみずからの強みとして、これからもうまく活用していくべきである。
- 「る」「た」は英文法での「時制」の表現にはあたらない。「和」の日本語に「時制」はないと考えてよい。「～た」イコール「過去形」は明治以降の発明品である。
- 2つの動詞を結合したものを「複合動詞」という。日本語は、こうした複合動詞の利用が非常に多い言語である。
- 日本語では、さまざまなかたちで叙述内容に対する判断と相手に対する態度の表明を行う。
- 「～れる／られる」はコトに対する「無力感」の認識である。「～せる／させる」は、コトに対して

話し手/書き手の支配力がきわめて強く及ぶという認識である。

- 「テ形」は、「コト」に対する話し手/書き手の「存在」「継続」「完了」などの判断を示している。「テ形」と英語の現在進行形は一対一対応をしない。
- 「～ない」は、コトの「非存在（非在）」性を話し手/書き手が判断したことを表す。英語の「否定」とは異なる。
- （「～らしい・ようだ・そうだ」は、コトの内容について話し手/書き手が自分の五感や外部情報を使って予想をするときに用いる。「～ね・よ・さ」は、話し手/書き手の聞き手/読み手に対する態度を表す。「～か」は、聞き手/読み手に対してコトに対する確認を求めるための表現である。「～なあ、ねえ、ぞ」は、聞き手/読み手に対してコトに対する同意を求めるための表現である。

## 命題をつなぐ

### 【要約】

- 言語における原子命題の結合のありかたを考える際、サイエンスにおける「原子の化学結合」という概念を例えとして用いると説明が非常にうまくいく。言語において物質の原子に当たるものが「原子命題」である。複数の原子命題が「結合」すると「分子命題」となり、もとの原子と異なる性質を持つようになる。
- 原子命題をひとつだけ含む文を「原子命題文」と呼ぶ。2つ以上の原子命題を含む「分子命題文」と呼ぶ。
- 文の結合には、「連用展叙」（連用中止法）での結合と「連体展叙」（連体修飾）での2つの方法がある。
- また2つの文を接続する場合には、その接続に含まれる意味や機能に応じて、さまざまな接続表現が用いられる。
- 英語センテンスの思考表現の基本が「ブロック」型であるのに対して、日本語文の思考表現の基本は「フロー」型である。その思考表現は、提題→展開→統合化→締め括りというプロセスで進む。
- 日本語文を明晰なものにするためには、各要素間の「心理的な距離」に十分に注意をすべきである。

## 思考の分析(1)

### 【要約】

- 日本語の「文」は、「認識」「判断・態度」「伝達」という3層の入れ子構造になっている。学問的には、「認識」を「命題/叙述内容」、「判断・態度」を「対事的モダリティ」、「伝達」を「対人的モダリティ」などと呼ぶのが一般的であるが、それが指し示すものは「認識」「判断・態度」「伝達」と同じことである。
- 「認識・思考」（命題/叙述内容）は、その人が認識・思考したことの内容の表現である。

- 日本語の文では「認識・思考」（命題/叙述内容）だけでなく、「判断・態度」（対事的モダリティ）と「伝達」（対人的モダリティ）も必ず表現しなければならない。「判断・態度」（対事的モダリティ）/「伝達」（対人的モダリティ）の不可欠性が日本語という言葉の最大の特徴のひとつである。なお英語ではこの伝達（対人的モダリティ）の部分は不可欠な要素ではない。したがって、話し手/書き手の「認識」「判断・態度」を中立的なかたちで表現することが可能である。

## 思考の分析(2)

### 【要約】

- 言葉を通じておこなわれる思考は、一本の線上で展開される。小さな思考の単位成分をひとつずつ線状に積み重ねていくことが、私たちの言語による思考活動の本質的なあり方である。
- 英語での思考の具体的な方法は、Subject、Predicate、Modifier という単位の組み合わせでおこなわれる。思考要素の識別方法としては基本的に形態ではなく相対的な位置関係が用いられる。
- いっぽう、日本語での思考の展開の具体的なあり方は次のようなプロセスをとる。①「体言（名詞）＋助詞」「用言（動詞/形容詞/形容動詞）の連用形」「連用副詞」という3つの単位成分を次々と展開していき（展叙）、②その内容を最後に用言で統合化し（統叙）、③それを文として終結させる（陳述）、あるいは④それを再展開させていく（再展叙）

## 思考の展開

### 【要約】

- 「心と言葉モデル」では、思考を基本単位に分けたのちに再統合化させて思考の展開をしている。また日本語思考での展開のあり方を「並列」と「連続」という2つのタイプに分ける。
- 連体展叙（連体修飾）での並列では、場合によっては接続のあり方が一意に決まらない。これは連体展叙が持つ大きな欠点のひとつである。

## 思考の構造化

### 【要約】

- 思考の展開のあり方は、構造図で表現することができる。構造図では、思考の基本単位ごとに行を変え、それぞれの思考の基本単位が文中で占めているステータスをインデントの深さで表現する。これによって文の構造を一覧することができる。
- 思考の構造図は、日本語の文構造を一覧するうえで非常に便利なものであるが、その構造図をみても、日本語の文での思考の構造化には一定の限界を設定すべきであることがよくわかる。
- 構造図の分析からは、日本語の1文としてまとめられる思考の基本単位の数は4±1程度に

することが、わかりやすい文としての条件であることが分かる。また、「入れ子構造」を必要最小限に抑えることも、わかりやすい文をつくるための条件である

## 思考の表現

### 【要約】

- 現代日本語は、やまとことば、漢語、翻訳語（じつは西欧語）の3つの言語に支えられた「三脚」言語である。そのうちのどの1つが欠けても現代日本語は機能しなくなる。
- 「漢語」による思考のカプセル化は現代日本語にとって不可欠なものだが、それにはメリットだけでなくデメリット（理解が中途半端になる）もある。
- カタカナ語については本質論からいえば、その使用が日本語の認識・思考・表現の価値を大きく高めることはない。しかしそこに実利的な価値があることは確かである。そうした側面もまた考慮にいれながら、私たちはカタカナ語をうまく使いこなしていくべきである。